

## 日本の歴史 36

### 『飛鳥の木簡： 古代史の新たな解明』

市大樹著（中央公論新社 中公新書 2012）

本書の請求記号 210.33Ich

稲垣 宏行

飛鳥時代、いわゆる古代の日本は紙と木簡が同時に使われた紙木併用時代でした。当時を知る手がかりとして『古事記』『日本書紀』など紙媒体の方が重視されがちですが、奈良文化財研究所研究員の著者は、木簡を重視する立場から本書を著しています。著者は木簡を選んだ理由の一つとして、『日本書紀』のような紙の編纂史料の場合、編纂者が史実を改変している可能性があるが、木簡は主に日常生活で使用される使い捨ての媒体で、その可能性は無いと見ている点を本書で述べています。

著者は木簡を元に、一般には645年に発布されたとする大化改新の有無について独自の見解を述べています。改新の詔みことりは『日本書紀』でもその記述が整然としており、701年施行の大宝令の規定とほぼ同じ部分もありました。地理的区分も詔では「郡」が使われています。しかし、実際には645年以前から大宝令施行まで「評」の方が使われていた指摘もあります。そのため、1950年代から論争が起こっており、その存在が疑問視されてきました。ただ、著者はそういった不審点を認めつつも、詔は存在していたのではないかと考えています。その論拠として「国-郡-里」の地方行政区分に近い「国-評-五十戸」制というものが644～645年の間に施行されたことを示す木簡が飛鳥寺北西の石神遺跡で2002年に発掘されたことを挙げています。

著者は大化改新のほか、日本と中国・朝鮮半島との関係、日本最古の寺院である飛鳥寺などについても、発掘された木簡によって解明を試みています。漢字の発音についても、その下に万葉仮名で字音が注記された「音義木簡」がありますが、この木簡から漢字の発音に朝鮮半島から伝わった「古韓音」が関わった可能性を指摘してい

ます。また、韓国ソウル近郊の二聖山城跡イソンサンソンから発掘された「前白木簡ぜんぱく」から、日本の「変体漢文」が朝鮮半島に由来するもので、日本語のルーツの一つがそこにあったという見解を導き出している点も興味深いものです。飛鳥寺の活動についても、宗教のみに止まらず、医療、漢字の解説、暦や論語、和歌の作成など多彩な分野で活動していたことも木簡を使って描き出しています。

木簡が多く発掘されたのは1990年代後半以降。史料媒体としてはまだ新しいものと言えます。しかし、その記載内容は文書、付札、荷札、呪術など多彩で、多くが庶民の生活に即したものです。文書や付札、荷札として使用されるものは、記録カードのような利便性があったと言われていきます。文字などの練習に利用された木簡もあると言います。本書巻頭の図表では、役人の似顔絵が描かれた木簡も挙げられています。

古代史一つ取っても物事を見る尺度になるものは多様で、身近に存在するものでも可能であることを本書は示しているように思えます。本書の場合は木簡であり、『日本書紀』など冊子体の様に一枚に多くの情報が書き込めるわけではありません。しかし、その一枚一枚に書かれた事象が古代史を知る上で『日本書紀』などに勝るとも劣らないほど有益であることを本書は十分に示してくれたのではないかと思います。古代史に限らず日本の歴史はまだ完全に解明されていません。だからこそ、意外な物から歴史の異なる姿が浮き彫りにされることがありますが、それは古代史を含めた日本史の醍醐味だと言えるものとも考えられます。

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）